

マスターズを彩るレジェンドたち (21)

暦では五月。皐月は勢い良く泳ぐこいのぼりの季節。端午の節句だ。早くコロナ禍が解消し、五月晴れのような世の中がこないものか。全国には「1日も早くマスターズ陸上を」と望む声強い。今月もマスターズ陸上で活躍するレジェンドを紹介したい。登場していただくのは、10000mで4クラス目の日本記録をつかった茨城の山口功さんと、女子砲丸投・円盤投で活躍する神奈川の玄蕃昌子さんだ。

写真提供／山口功さん、玄蕃昌子さん

山口功さん(81歳・茨城)
10000mでM65から4クラスで
日本記録樹立

2022年4月で81歳になった山口さんは、10000mで66歳のときにM65クラスの日本記録となる37分41秒63を出し、続くM70で39分22秒18、M75では42分45秒75をマーク、M80では昨年12月の京都マスターズの中長距離記録会に参戦して、46分03秒56で走った。

山口さんが10000mで4クラス目の日本新を出した舞台は、京都市の西京極にある競技場だった。従来の記録、49分31秒99を3分28秒43も短縮する素晴らしい新記録となった。まさに傘寿(80歳)を記念するタイムといっている。

「コロナの影響でマスターズ陸上がないので、参加させてもらいました。記録はたまたま出たまでです」と控えめに話す。住んでいる茨城県の土浦市から、足を延ばしたかいたったというものだ。

10000mで4クラスの記録の持ち主であるから、同種目が最も得意かといえそうではない。山口さんがマスターズの仲間入りをしたのは60歳代。早くも68歳のときに1マイル(1609.344m)で5分32秒76のM65クラスの日本記録をつかった。

09年9月に京都・西京極競技場であった第2回国際ゴールドマスターズ選手権のレースだった。1マイルは72歳のときに、同じ京都での13年国際ゴールドマスターズの大会で、M70

クラスに5分49秒33の新記録をついている。

それだけではない。2011年に和歌山で行われた第32回全日本マスターズ大会では、M70・1500mで5分20秒69、3000mで11分37秒49と中距離の種目も制しているのだ。

いわば中距離から長距離までと幅広い。11年には10000mで先述した39分22秒18のM70クラスの日本記録を出している。以前、ロードの長い距離に出たこともあるが、しっくりいかず「60歳代のいつ頃からか、トラックにかじを切った」そうだ。

陸上歴がなくても 楽しめるマスターズ

山口さんの陸上歴はマスターズに入会してから。高校時代にも陸上の経験はない。ただ、「小・中学生の頃は運動会の短距離は速かった」と言い、50歳代の後半から走り始めて、次第に地力を付けた。「恐らく20歳代の頃より、60代になってからの方が上ですよ」と笑いながら話す。

「マスターズのいいところは5歳刻みで楽しむ(競う)ことができることですね」と、レースを重ねるたびにのめり込んだ。77歳の18年には第39回全日本マスターズ大会が鳥取であった。M75・800mは2分56秒43で2位になったが、1500mは6分01秒05、3000mが12分32秒91で優勝した。

同年10月に奈良で開かれた2018国際ゴールド・マスターズの1マイルに6分23秒05の大会新でトップに。好



10000m 4クラスで日本記録を持つ山口さんは、M75・3000mの日本記録も持っている

調を維持していたはずなのに、翌年の第40回記念大会となった群馬での全日本マスターズ大会には姿を見せず、寂しかった。

特に印象に残る大会は16年に新潟で開催された第37回全日本マスターズ大会だ。75歳になった年でM75クラスで大暴れ。800m、1500m、3000mの3種目制覇をやったのけたのだ。うれしかったのは、ライバルであった同年齢の前田征四郎さん(広島)と800mと3000mで競い、勝ったことだ。

このうち3000mの11分45秒90は日本新だった。快勝した山口さんは「このときは本当にうれしかった」とほほ笑んだ。この年は9月の全日本大会の前、5月にシンガポールで第19回アジアのマスターズ大会があり、山口さ

んはM75・800m、1500m、10000mを制している。

このほかのアジア大会でも活躍している山口さんは、今年の4月17日に富山マスターズ記録会のM80・5000mに参加。日本記録には及ばなかったが、23分26秒37の茨城マスターズ新記録でゴールした。

玄蕃昌子さん(83歳・神奈川) マスターズ陸上の砲丸投、 円盤投に夢中

皇月のそよ風が心地よい。胸いっぱい空気を吸い込んだ玄蕃さん。「1日も早く砲丸か、円盤を手にした」と、マスターズの再開を待ちわびている。

2020年度のマスターズ記録集によると、W80クラスの砲丸投8m77、円盤投21m45の項に玄蕃さんの名前がある。いわゆる日本記録だ。

玄蕃さんの名前がマスターズ陸上で出てくる前は、全国レクリエーション大会に参加している。マスターズの会員になってからも72歳の11年、第24回全国レク大会に出場。W70・砲丸投に8m13で快勝したが、円盤投は21m86で26m06を投げた嘉成俱子さん(当時・福島、現・兵庫)に敗れた。

嘉成さん(2020年8月号参照)の強さは別格だ。年齢は玄蕃さんより二つ下。第32回全日本マスターズ大会でもW70・砲丸投は嘉成さんが9m38、玄蕃さんは7m94、円盤投では25m32、23m43だった。二人が同クラスのときは、ご両人で1、2位と決まっていた。

だが、クラスが変わって、玄蕃さんが先にW75、80クラスに上がると、玄蕃さんの独り舞台。例を挙げると、玄蕃さんが75歳になった年の14年、岩手・北上であった第35回全日本マスターズ大会と第18回アジア・マスターズと兼ねて行われたときは――。

W75・砲丸投で9m86、円盤投が24m14と国内とアジアの両大会に優

勝し、女子の優秀選手に輝いた。「調子が良かったのは事実です。全大会を通じて一番うれしかった」と玄蕃さん。76歳になった15年も好調を保ち、第36回全日本マスターズではW75・砲丸投でただ1人、8m台の8m92で快勝。円盤投でも22m61と20m超えで制した。

また、フランス・リヨンで開かれた第21回世界マスターズでは「外国人選手のパワーはすごい」と言いながら、W75・砲丸投で9m35、円盤投は22m44で共に2位と健闘した。このクラスの円盤投で24m26の日本記録を出したのもこの年だ。

同年の1年前には、重量五種に挑み、21m74-8m96-24m26-16m99-6m72と3732点の日本記録を樹立。「コロナが始まる前までは元気そのものでした。ケガもしたことがないし、調子が良かったんです」と話す。

言葉どおり19年の第40回記念国際・全日本マスターズ大会で80歳の玄蕃さんはW80・砲丸投で8m48、円盤投で20m77の両種目に日本新で圧勝した。同大会の2位の記録が7m19、12m59だから、いかに玄蕃さんが優れていたか。

さらにこの年には関東マスターズ大会のW80・円盤投で21m45、12月に

マレーシア・クチンでの第21回アジア・マスターズ選手権の同クラスの砲丸投で8m77と日本記録を伸ばした。また、円盤投でも21m42の日本新で1位となったが、同記録は21m45のベストには及ばず、砲丸投の順位は2位だった。

玄蕃さんは中学生の頃には足が速く「走るのが好きだった」。横浜市の戸塚高時代には陸上部に入ったものの、学校自体が「強い」とはいえなかったが、玄蕃さんは関東インターハイまで進んだ。種目は短距離ではなく円盤投だった。「体が大きくなったので、円盤でも」と、試みたのだ。

だが、指導してくれる人もなく「ターンも十分にできなくて。多分、30mぐらいだったのでは」と話すが、神奈川県では上位に食い込んでいた。高校を卒業後ある大手の製菓会社に入り、陸上をしていたが、玄蕃さんが20歳のときに陸上部がなくなった。その後はバレーボールに熱中するなどして過ごしてきた。順調だったマスターズ時代もコロナウイルスが流行してからは、よく脚に肉離れが生じたり「イヤなことばかり。早くコロナ禍が落ち着き、マスターズ陸上を再開してほしい」と願っている。今もジムに通いその日に備えている。

青森M90リレーをTVで紹介

古いニュースになるが3月6日『ほっとネット東北・世界のおじいちゃん』が青森朝日放送で放映された。内容は、M90・4×100mR、4×400mRで、世界記録を樹立した、青森県を拠点に90歳以上で活動する選手たちを取り上げたもの。

「短命県といわれる青森の評判を返上!」と90歳以上のおじいちゃんたちが意気込み、新記録を達成させるストーリーを60分にまとめている。「あきらめない心の強さを教えてくれる」内容だ。



「1日も早く、砲丸か円盤を手にした」とマスターズの再開を待ちわびる玄蕃さん